

■井原西鶴 俳人・浮世草子作者。古典的な物語を脱して、初めて庶民の生活を題材に創作し、近代小説を準備した。

いはらさいかく

初の高札・1642=

生。

出自や家系はすべて明らかでないが、一説によると、俗称を平山藤五という大坂の裕福な町人で、名跡を手代に譲り、気ままに生きることを選んだという。

徳川家光没・1651= 9歳：

・・・・・・1656=14歳：この頃より俳諧を学び始める。

明暦の大火・1657=15歳：

・・・・・・1660=18歳：

松平信綱没・1662=20歳：この頃、俳諧の点者となる。

酒井忠清大老1666=24歳：この年より、諸句集に作品がとりあげられる。

シャクシャインの乱 1669=27歳：

東南海運確立1672=30歳：立机。

越後屋オープン 1673=31歳：**\*貞門から異端視されていた宗因ら新興勢力の楯となるかたちで「生玉万句」を興行。また大坂俳壇の正統的な人脈の中に自己を位置づけるべく「哥仙大坂俳諧師」を編んで、中央俳壇進出の望みを果たし、**

・・・・・・1674=32歳：西鶴の号を用い始める。

談林派俳諧・1675=33歳：3人の幼児を遺し24の若さで病没した愛妻追善のため「独吟一日千句」を興行、剃髪して僧形となった。

・・・・・・1676=34歳：速吟の傾向はこのころからいっそう強まり、「古今俳諧師手鑑」を編集刊行し、

・・・・・・1677=35歳：1日1600句の独吟「西鶴俳諧大句数」を成就、刊行。

藤十郎登場・1678=36歳：「虎溪の橋」「物種集」刊。

越後騒動・1679=37歳：「西鶴五百韻」「飛梅千句」刊。

徳川綱吉將軍1680=38歳：**\*4000句の独吟「西鶴大矢数」を成就、刊行した。**

天和・貞享期の俳諧は、漢詩文もどきのことは遊びから優美な連歌調へ、“親句”の付合から“疎句”の付合へと急速に移り変わったが、今様の風俗を俳言と俳言の緊密な付合上に描き出そうとする親句主義の西鶴はこれについてゆけず、一時俳諧の制作から遠ざかった。しかし俳言による表現意欲は衰えず、一般に俳人の転合書というかたちで存在した散文の制作に力を入れ、

好色一代男・1682=40歳：**\*「好色一代男」を完成、これが浮世草子の第1作となった。小説として豊かに肉づけられたこの俳言の書は、俳人層を中心にひろく受け入れられ、版を重ね、西鶴の作家的自覚と書肆の出版意欲とを促し、**

八百屋お七・1683=41歳：「難波の口は伊勢の白粉」「精進脛」刊。

堀田正俊暗殺1684=42歳：遊里小説集「諸艶大鑑」(別称「好色二代男」)が出された。「俳諧女哥仙」刊。1日独吟2万3500句という、余人の追隨を許さぬ快記録を立てたことで、いよいよ作家活動へのふんざりがついて、

出世景清初演1685=43歳：「曆」「凱陣八島」刊。「西鶴諸国はなし」「梶久一世の物語」、

・・・・・・1686=44歳：「好色五人女」「好色一代女」「本朝二十不孝」、

生類憐令始・1687=45歳：「男色大鑑」「懷硯」「武道伝来記」、

日本永代蔵・1688=46歳：「武家義理物語」「嵐無常物語」「色里三所世帯」「新可笑記」「好色盛衰記」「日本永代蔵」、

・・・・・・1689=47歳：地誌「一目玉鉾」。「本朝桜陰比事」など、短期間に、浮世草子の大半を書き上げ、刊行。

別子銅山始・1691=49歳：西鶴らの評点を笑いものにした「俳諧物見車」への反論書「俳諧石車」の述作に情熱を燃やすなど、健在ぶりを示す一方、散文の面では、

世間胸算用・1692=50歳：**\*到達点となる名作「世間胸算用」を発表して、**

奥の細道・1693=51歳：大坂で没した。